389
54

389-54

著原グルベドンリトス
譯郎太林森 文學士 醫學士

脚本名著選集第一篇

ペリカン

東京 善文社發行

東大
11 7 6
文内

ペリカン

ストリンドベルク作

森林太郎譯

時　巴里

場　所

背景に食堂に通ずる戸あり。右の方、隅を截りたる壁面に出窓に通ずる戸あり。

抽斗附の大書卓。赤天鵝絨の覆ある長椅子。舟底椅子。

音　樂

第一幕　ショパン

ペリカン

ペリカン

ファンテジイ、アンプロンプチュウ、遺稿、オピユス六十六

第二幕　ゴダルド

ジョスラン中の子守歌

第三幕　デルプ、フエルラリ

ワルツ「エル、ザアハテ、ミユル」

人物

母　エリイゼ　未亡人

倅　フリイドリヒ　法科大學生

娘　ゲルダ

婿　アクセル　ゲルダの配偶

女中　グレエテ

第一幕

（母喪服にて椅子に靠り、うと〳〵してゐる。折々耳を聳てて物を聞く。不安。同じ家の別室にてショパンの曲を奏せり。○女中背景の戸より入り來る。）

母　あとをお締。

女中　お一人でいらつしやるの。

母　あとをお締と云へば。○ピアノを引いてゐるのは誰だい。

女中　若旦那ですわ。○恐ろしい晩ぢやございませんか、吹降で。

母　お締と云ふのに。石炭酸だの、あの棺の上の樅の切枝だのの匂がして、わたしには我慢が出來ないのだから。

ペリカン

女中　それは先からわたしにはわかつてゐましたの。ですから旦那様のお棺はすぐに埋葬地の附屬舍とかへお遣なさるがいゝと申したぢやございませんか。

母　でも子供達が式を内でしたいと云ふのだから、しかたがないやね。

女中　ではなぜ此お内にぢつとしていらつしやるの、外へ越さないで。

母　家主が越させないのだからね。わたし達を逃がさない積りになつてゐるのだから。(間。)お前あの赤い長椅子に被せてあつた切を、なぜ取つたのだい。

女中　洗濯屋に遣らなくちやなりませんから。(間。)旦那様はあの長椅子の上で息をお引取なさいましたわね。どこか外へ出しておしまひなさればいゝに。

母　遺産目錄が出來るまでは何一つ動せないのだよ。それでわたしはこゝに閉ぢ籠もつてゐるのさ。外の部屋にはゐたくないし。

女中　外の部屋がなぜおいやなの。

母　それはいろんな事が思ひ出されるからね。いろんな、いやな事が。それにたまらない匂がして。〇まだ引いてゐるね。フリイドリヒだとお云ひだつけね。

女中　えゝ。あの方はお内にいらつしつては、お體の好くなりつこはございません。しよつちゆ、なんだか氣になつて落着かないと云ふ風で。それにいつも物欲しさうな御樣子をなすつて。「おれはつひぞ腹一ぱい物を食つたことがない」なんと仰やるのですもの。

母　生れた時から弱々しい子なのだよ。

女中　牛乳で育てた子供は、乳離れをする頃から滋養になる物をたべさせなくちやいけないのです。

母　（鋭く。）それをしなかつたこお云ひのかい。

女中　なさらなかつたのでもございますまいがね、廉からう悪かろうこ云ふぢやございませんか、なんだつて買出しにおきばりなさらないのです。朝學校に往く子供に、小さいパン一切こ、養のコオヒイ一杯しか遣らないのは、ひごうございますわ。

母　でも内の子供が食べものの事を彼此云つたここはないがね。

女中　それはあなたには仰やいませんこも。こはがつていらつしやるから。少し大きくなつてあんよが出來るやうにおなりになるこ、しよつちゆ、わたしのここへいらつしやいました。臺所へ。

母　なにしろ内は豐でなかつたからね。

女中　いゝえ。新聞で見ますこ、旦那様は二萬クロオヌの税金をお納になつた年もございました。

母　物入が多いのだから。

女中　それは入りますこも。兎に角、子供衆はごなたもお弱くて、お孃さん、いや、若奥様なんか、もう二十におなりなすつたのに、お體はほんたうに大人になつていらつしやいません。

母　まあ好くしやべるここ。

女中　えゝ、えゝ。（間。）少し煖爐を焚き附けませうか。此お部屋は隨分お寒いやうです。

母　それには及ばないよ。内には燃してしまふお金はないのだから。

女中　でも若旦那なんか、朝から晩まで寒がつて、いぢけていらつしやいます。外へお出掛なさるか、さうでなければ、ピアノでもお引きなさらなくちや、ぢつとしてはいらつしやられないのです。

母　一たいあれは寒がりだよ。

女中　なぜでございませう。

母　あんまり物をつけ〳〵云はないものだよ。（間。）誰か戸の外を歩いてゐるぢやないか。

女中　いゝえ。誰も歩いてゐやしません。

母　わたし、なにも、幽靈が出ようなんぞと思つて、こはがつてゐやしないよ。お前さう思やすまいね。

女中　存じません。とにかく、わたし、もう長くこちらに御奉公いたしてゐようとは思ひません。わたしはなんの氣なしにふいとここちらへ來て、子供衆の生立を見届けるのがお役目のやうになりました。そのうち奉公人のひどい目に逢はせられるのを見て、わたしは出て行かうと思ひました。その癖出て行かれなかつたのですね。出て行つては濟まないやうな氣がしたのですね。まあ、お孃さんが今度若奥樣におなりなすつて見れば、もうわたしの役目も濟んだやうなものでせう。そろ〳〵お暇申してもいゝでせう。只こゝの所ちよつと。

母　まあ、お前何を言つてゐるのだい。わたしにはお前の言草は一言もわからないよ。わたしがごの位子供のために犧牲になつてゐるか、家の世話をごれだけ燒いたか、ごれだけわたしの義務を果した

ペリカン　か、それは世間で皆知つてゐます。それにわたしに越度でもあるやうにいふのは、お前一人だ。お前なんぞになに、わたしが構ふもんかね。お前、出て行きたけりや出ておいで。若夫婦が白人下宿から歸つて此内にゐることになればわたしはもう女中は置かない積りだから。

女中　まあ、お樂が出來なすりや結構です。恩がへしをする子供は少いもので、壻さんも姑を難有がりはしないものです。お金でも出せば格別。

母　餘計な心配をおしでない。わたしはお金を出した上に、手助になつて遣る積りだ。それにわたしの所の壻は、餘所の壻とは違ふからね。

女中　さうでせうか。

母　さうなのだよ。あの人はわたしを姑扱ひにはしないのだよ。まあ、きやうだいのやうだと云はうか、それとも友達のやうだと云はうか

（女中表情あり。）

母　お前の腹の中で思つてゐる事は、わたしは知つてゐるよ。それは、わたしは壻が好だとも。何も壻が好ではならないと云ふ道理もあるまいし、それに好いて遣つていゝ人柄なのだもの。亡くなつた旦那はあの人を好かなかつた。燒餅と云つてはお氣の毒だが、まあ、それみだつたのさ。わたしと壻との中が好すぎると思ひなすつたのだね。わたしはもうそんな年でもないのに。おや、何かおいひだつたかい。

女中　いゝえ。なんにも申しません。でも誰だか廊下を通りますね。

ペリカン

あ、若旦那です。咳をしなさるから。煖爐を焚き附けませうか。

母　いらないよ。

女中　わたし今だから申しますがね、此お内にゐる間、わたし、しよつちゆ、寒くて、しよつちゆ、お中が透いてゐました。それはまだ我慢が出來ます。責て夜具だけでも、夜具らしい夜具をお借申したいものですね。わたしも此年になつて、體も隨分弱つてゐるのですから。

母　お前、今出て行く眞際になつて、そんな事を言はなくても好ささうなものだね。

女中　ほんにさうでしたつけ。つい忘れてしまつてさう云つたのです。ですが、お内の恥にならないやうに、わたしの今被て寢る夜具だけは燒き棄てておしまひなさいまし。死人に被せた事のある夜具ですからね。燒いてしまへば、あなたも跡から來るものに氣の毒な思をなさらなくて濟むこ云ふものです。跡から誰か來るにしましても

母　誰も來やしないよ。

女中　さうでございますか。まあ、來たつてもゐつきやしません。これでわたしの見てゐる前で出て行つた女が、もう五十人の上ですからね。

母　それは皆性の惡い女だからだよ。一體お前達、女中こ云ふものは皆性が惡いのだ。

女中　御挨拶ですわね。さあ、これから奥樣、あなたの番ですね。誰

でも自分の番が廻つて來るのですからね。

母　もういゝ加減におし。わたしは話を早く切り上げてもらひたいからね。

女中　えゝ〳〵。なんでも物事は早いものです。あのあなたの番もですね、あなたの思つてゐなさるより早く廻つて來ますよ。

（女中退場。）

（倅手に一卷の書を持ち、讀みつゝ來る。咳嗽す。少し吃る癖あり。）

母　跡をお締。

倅　なぜです。

母　それはなんといふ返詞だい。○何か用かい。

倅　少しこゝの椅子に掛けて勉強しても好いでせう。わたしの所は寒くつてたまらないのですから。

母　お前は寒がりだよ。

倅　ごうもぢつとしてゐると、寒さがひどくこたへて來ましてね。

（間。○倅は暫く書を讀むまねしてゐる、さて唐突に云ふ。）

もう遺產目錄は出來たのでせうか。

母　なぜそんな事をきくの。まだ喪が濟まなくてはね。お前おごうさんが亡くなつたのに悲しくはないのかい。

倅　それは悲しくないことはありません。しかし、おごうさんは今の方がおしあはせでせう。僕はおごうさんが樂におなりなすつていゝ

と思ひます。やつこの事で樂におなりなすつたのですから。それはそれとして、僕は僕で自分の立場を知りたく思ふのです。卒業試驗を受けるまで、借金をせずに濟むか濟まないか。

番　おこうさんには遺産はありやしませむ。それはお前だつて知つてゐるだらう。ごうかしたら借金があるかも知れません。

伴　でも店だつて幾らかの値打があるでせう。

番　だつて、お前、品物のない店は店ではないからね、お前にだつてわかるだらうが。

伴　（思案して）しかし名前がありますからね。得意先が附いてゐますからね。

番　得意先は賣物になりやしないよ。

（間。）

伴　いゝえ。得意先は有價物件ださうです。

番　お前、辯護士の所か何かへ往つたね。（間。）それがお前の喪中のしごとなのかい。

伴　なに、さういふわけぢやありません。しかしあれはあれ、これはこれですからね。ゲルダとアクセルとはどこへ往つたのです。

番　けさ新婚旅行から歸つて、白人下宿にゐるのだよ。

伴　ふん。ではせめて腹一ぱい物がくへるのですね。

番　まあ、食物（たべもの）の事ばかし云ふ子だね。何かい内の食物が悪いとおいひのかい。

伴　なあに。さうぢやありません。

母　さうに違ひないよ。そこでお前に一つ聞かなくちやならない事があるが、お前覺えてゐるだらうね、それ、あのわたしがちよいとの間離緣になつてゐた時ね、お前はおこうさんと二人きりでゐたね、あの時おこうさんが店の勘定の事なんか話しはしなかつたかい。

倖　（書を耽り讀むらしく。）いゝえ。別に何も話しやしません。

母　おこうさんは近年二萬クロオヌの稅金を納めてゐたと云ふのに、跡に何も殘つてゐないと云ふわけが、お前にはわかつてゐるのぢやないかい。

倖　いゝえ。店の事は僕は少しも知りません。しかしいつでしたか、ごうも暮しに掛かつて困ると仰やいましたつけ。

倖　ふん。さう云ひなすつたかい。借金があるとは云ひなさらないのだね。

倖　いゝえ。僕は知りません。もとは借金があつたのですが、それはおこうさんが拂つてしまつた筈です。

母　ではお金はどうなつたのだらう。遺言狀がありやしないかしら。おこうさんはわたしを憎がつてゐなすつた。離婚すると云つてわたしを嚇かしなすつたことも度々ある。どこかへお金を隱してお置なさりはすまいかね。（間。）ねえ、お前、後生だからわたしに正直に言つてお聞せ。おこうさんはどこか外へ一軒、家を持つてゐなすつたのではあるまいね。さうでないまでもお金の掛かる女なんぞがあつたのではあるまいね。

倖　いゝえ。そんな事はちつとも知りません。そんな事はありやうが

ないと思ひます。

母　（耳を欹つ。）誰か廊下を通つてゐるぢやないか。

伴　いゝえ。わたしにはなんにも聞えません。

母　わたしはこなひだ中から、葬式やら跡始末やらで、あまり心配をしたもんだから、少し神經質になつたのだよ。それはさうと、お前承知してゐるだらうね、ゲルダとお壻さんとが此内へ越して來りやお前は町へ下宿しなくちやならないのだが。

伴　えゝ。そりやあ知つてゐます。

母　お前、アクセルは嫌ひだね、

伴　えゝ。あの男は蟲が好きません。

母　でもあれはいゝ人で、それにしつかりした人だよ。お前仲好くしなくちやいけないよ。仲好くして上げていゝ人なのだから。

伴　ふん、向うでも僕を嫌つてゐます。それにおとうさんに意地悪くしてゐた男です。

母　それはごつちが悪かつたのかしら。

伴　いゝえ。おとうさんは意地悪ぢやありません。

母　さうおもひかい。

伴　あ、今は誰だか廊下を歩いてゐます。

母　電氣を二つおつけ。二つだけ。

（倅電燈に點火す。〇間。）

母　お前あのおとうさんの寫眞を持つておいでぢやないか。あそこの壁に掛つてゐるのを。

倅　なぜですか。

母　わたしあれがいやなのだから。あの目つきの意地の悪いこと。

倅　わたしにはさうは見えませんね。

母　そんなら卸しておしまひ。お前の好きなものだから、お前に遣ります。

倅　（寫眞の額を卸す。）えゝ。貰ひませう。

（間。）

母　もうゲルダこお壻さんこが歸つて來る頃だよ。お前こゝで逢つて挨拶をおしかい。

倅　いゝえ。僕そんな方には氣が向きません。それよりか、やつぱり自分の部屋に歸るこしませう。只すこしばかり煖爐に火が焚けるこいゝのですが。

母　内には燃してしまふお金はないのだよ。

倅　えゝ〳〵。おつかさんの其お詞は二十年このかた聞いてゐます。其癖世間への見えに馬鹿げた外國旅行なんぞはしたものです。そして料理店で百クロオヌの食事をしたこともあります。樺の木の薪が四コルドの薪ですよ。

母　まあ、お前はおしやべりだこね。

倅　えゝ。此内ではなんでも物が逆樣にいくのです。しかしもうそろ〳〵それもおしまひでせう。これから總勘定です。

母　わからないね。ごういふ意味なのだい。

倅　なに、遺產目錄が出來たり、其外いろんな事もありませうから。

母　其外いろんな事こは。

伸　借金は返さなくちやなりますまい。義務の果さずにあるのは果さなくちやなりますまい。

母　さうおおもひかい。

伸　それはさうこ、僕はフランネルの下着が買ひたいのですが。

母　まあ、ごうしてこんな時にそんな事が云へたものだらう。それよりかお前、少しでも自分で儲ける事を考へてくれなくては。

伸　それは僕だつて試驗さへしてしまへば。

母　ふん。そしたら餘所の卒業生のやうに、自分で借金をする事になるだらう。

伸　誰が僕に貸してくれるでせう。

母　それはおこう様のお友達でも貸すだらうよ。

伸　いゝえ。おこう様にはお友達はありませんでした。獨立して世を渡つて行く人には友達はありません。友達こいふのはお世詞の言ひつくらをする間柄なのですから。

母　まあ、たいした見識だこと。それはおこう様にをすはつたのかい。

伸　えゝ。おこう様はえらい人でした。えらくてゐて、こきたまぶまをなすつたのです。

母　まあ、あきれた。〇そこでお前はごうだい。およめさんでもほしいのかい。

伸　まつぴらです。結婚こはなんです。こつちはもこのままの獨身で、別に家政を切り廻す人が出來る。妾を法津上の保護を受ける人間に

する。わざ〳〵身に近い人間をこしらへて、それを仇敵にして、自分を攻撃するための戰鬪準備を整へさせる。まづ、僕はそんな損な事はしない積りです。

母　まあ、なんさいふ言草だね。○さあ〳〵、自分の部屋へおいで。その位聞けば、一度ぶりには澤山だ。お前、きつさ醉つてゐるね。

倅　えゝ。僕は腹に酒氣の絶えないやうにしてゐなくちやなりません。絶えるさ、咳がひどくなるし、それに腹のへつたのがわかりますから。

母　又食物が好くなかつたのかい。

倅　えゝ。好くないさ云ふわけでもありませんが、なんだか實がなくて空氣をたべるやうで。

母　（ぎつくりする。）ふん。もういゝから、あつちへおいで。

倅　又ごうかするさ恐ろしく胡椒や鹽が利き過ぎてゐて、たべればたべるほど腹がへるのです。まあ空氣に藥味を添へてたべるやうなものですね。

母　さにかくお前は醉つてゐるに違ひない。いゝから、あつちへおいで。

倅　えゝ〳〵。行きますさも。實はまだ少し言ひたい事があつたのですが、まあ、今度はこれだけにしませう。あゝ。

（倅退場。）

（母不安なる樣子にて室内をあちこち歩き、抽斗を拔きなぐす。）

○堺忙しげに登場）

母　（やさしく會釋す。）まあやつさの事で來ておくれだね。わたしほんさにお前さんに逢ひたかつたわ。だが、ゲルダは。

堺　跡から來ます。所で、いかがです。ごんな驅梅です。

母　まあ、お掛なさいよ。わたしいろ〳〵聞きたい事がありますから。式の晩からまだお目にかからないのですからね。○第一、ごうしてこんなに早く歸るこさになつたの。八日間さ云つたのぢやなくつて。それにまだたつた三日しきや立たないわ。

堺　なに、退屈になつたのです。二人きりでゐるさ、言ふだけの事を言つてしまつた跡がたまらなく寂しくなるものです。それにいつもかあさんさ三人でゐたもんですから、それが習慣になつてゐて、ゲルダもわたしもかあさんが戀しくなつたのです。

母　まあ、さうなの。それはこれまで三人一しよになつて、雨にも風にもこたへてゐたのだわね。そしてわたしはお前さん方のためになつたには違ひないわ。

堺　それにゲルダはほんの子供で、世間知らずでしてね。物事をわからずにきめてしまつてゐるやうな處があるし、又幾ちか依怙地で、たまには極端に何かに熱中したりして。

母　それはさうさ、式は好く出來たさはおもはなくつて。

堺　え〳〵。好く出來た處ぢやありません。無類の上出來でした。それにごうでした、あの詩の朗讀は。

母　あのわたしにあてた詩でせう。わたしさう思ふわ。娘の婚禮にあ

んな詩を聞かしてもらつた母親は昔からあるまいこおもふわ。それ、覺えてゐるでせう、「我胸に湧く血潮もて、雛をはぐくむペリカンの」こいふあそこね。わたし泣いちまつたわ。

壻　えゝ。なる程、あの時は、かあさん泣いてゐましたね。だがそれから御機嫌がなほつて、かあさんはプログラムにあるだけの舞踏をみななすつたぢやありませんか。ゲルダはも少しで燒餅を燒きさうでしたぜ。

母　それはあの時に始まつた事ではないわ。あれはわたしに喪中だから黑を着て出てくれこ云つたのにわたし構ひつけなかつたの。何も子供の言ふここを聽かなくちやならないこ云ふ法はないでせう。

壻　勿論そんな法はありませんこも。一體ゲルダはごうかしてゐますよ。わたしがごの女をでも見ただけで、氣違のやうになるのですから。

母　おや。お前さん達、中が好くはなくつて。

壻　かあさん知つていらつしやるぢやありませんか。別に中がごうのこうのこ云つたつて。

母　さうさね。ではもう喧嘩でもしたのでせうか。

壻　もうごこぢやないぢやありませんか。約束をしてからこつち、喧嘩より外したここはないのですもの。お負に今度わたしは現役が濟んで豫備少尉になつたでせう。氣のせいか知れませんが、ゲルダは軍服を着てゐた時ほご好くしてくれないやうで。

母　なぜ軍服を着てゐなさらないの。わたしだつてお前さんは軍服の

方が似合ふこおもふのだもの。只の服になるこ丸で別の人のやうですわ。

堺　豫備將校は召集せられた時しきや軍服を着ないここになつてゐます。

母　まあ。

堺　えゝ。條例にきめてあるのです。

母　それだこゲルダにも氣の毒だわね、約束をしたあひては陸軍將校で、夫は只の店員だこするこ。

堺　だつてしやうがないぢやありませんか。職業なしではゐられませんからね。それで思ひ出したのですが、一體こつちの店の方はごうなつてゐるのです。

母　正直の所、わたしちつこも知りませんの。たゞね、フリイドリヒが少し變だこ思ひますわ。

堺　ごう變なのです。

母　なんだか、ついさつきも變な事ばかし云つてゐましたの。

堺　のろまが。

母　いゝえ。そののろまがなか〳〵横著なものですよ。ごうもわたしには遺言狀か何かがありやしないか、貯金なんぞがしてありやしないかこ思はれてね。

堺　少しは探つて見ましたか。

母　それは抽斗は皆あけて見ましたが。

堺　誰のです。フリイドリヒのですか。

母　えゝ。それに紙屑籠も調へてゐます。あの子はよく手紙を書きさしては破いて棄てますから。

堺　だめです。そんな事はなんにもなりません。それより、おごうさんの抽斗は調べて見ましたか。

母　えゝ。それは見てよ。

堺　でもしつかり見たのですか。ごの抽斗も皆。

母　皆見てよ。

堺　でも卓の抽斗にはきつと二重底があるものですよ。

母　そんな事は知らなかつたわ。

堺　ではもう一度調べ直さなくちや。

母　いゝえ。もう障つてはいけないわ。遺産として封印がしてあるのだから。

堺　なに、封印を破らずに中を見ることも出來ます。

母　そんな事は出來ないでせう。

堺　出來なくつて。板を背後から剝がすのです。二重底は抽斗の奥にあります。

母　でもさうするには道具がいるでせう。

堺　なに、道具なしでもできます。

母　だがゲルダに知れてはわるいよ。

堺　無論知らせつこなしです。あれが知らうもんならすぐにフリイドリヒにしやべつてしまひます。

母　（戸に鎖を卸す、）用心のためだから。

壻　（卓の背面を檢す。）おや、これは誰か遣つて見た跡だ。うしろの板は剝いである。これ、こんなに手がはいります。

母　それはきつゝフリイドリヒがしたのだよ。それ、わたしが變だゝ云つたでせう。早くおし、誰か來るやうだ。

壻　おや、こゝに書類がある。

母　早くおし、誰か來てよ。

壻　狀袋に入れてある。

母　ゲルダだよ。早くそれをわたしにお渡し。早く。

壻　（母に書類を渡す。）さあ。早く隱しておしまひ。

（母書類を隱す。）

（人ありて戸を開かむゝ試み、次で叩く。）

壻　なんだつて鎖なんか掛けたんです。何もかもけごられてしまふ。

母　默つておいで。

壻　馬鹿だ。おあけゝ云へば。あけなけりや、おれが、えゝ。（戸を開く。）

ゲルダ　（戸口より入る、不興氣なり。）なぜ鎖を掛けてゐたの。

母　まあ、此子は、はいつて來て挨拶もしないの。式の晩きりで逢はないのぢやないか。ごうだつたの。旅行は面白かつたの。なんでも好いから話してお聞せよ。そんな陰氣な顏をしないで。

ゲルダ　（椅子に掛く。氣の詰まる樣子。）なぜ鎖を掛けてゐたの。

母　だつてひとりでにあいてしやうがないのだもの、誰か通る度に小言をいふのにも、わたしあき〳〵しちまつたから。〇それはさうゝ

早く相談してお前達の部屋をこしらへなくちや。ごうせこゝへ越して來るのだらう。

ゲルダ　それはさうしなくちやならないでせう。わたしごうでもいゝわ。あなた、ごうなの。

壻　おれはきつこいゝ住ひになるこ思ふのだ。そしてかあさんに好くして上げなくちや。三人は中よしなのだから。

ゲルダ　かあさんはごこにゐなさるの。

母　こゝだよ。寢臺を一つ入れさへすりやいゝのだ。

壻　おつこ座敷に寢臺を入れる奴があるものか。あまりねんねえだ。

ゲルダ　（耳を欹つ。）わたしに言つたの。

壻　なに、かあさんの事さ。まあ、ごうにかなるだらう。ごうせお互に我慢をしあはなくちや。かあさんの出してくださるお金で暮しは立つのだから。

ゲルダ　（機嫌なほる。）それにすけていたゞけるわ。

母　それはすけて遣るこも。だが雜巾がけだけは御免だよ。

ゲルダ　そんな事をしていたゞかうこは思はないわ。わたし外の事はごうでもいゝの。アクセルさんさへ眞面目にしてゐて下されば。アクセルさんに手を出すものがありや、わたし承知しないわ。あの白人下宿はそれがいやだつたわ。旅行を早く切りあげたのもそのせいだわ。わたしアクセルさんをごうかする奴は殺しちまふから。わたしきつこ云つて置くわ。

母　さあ〳〵あつちへ一しよに往つて部屋をこさへて見ようぢやない

か。

壻　（母の顔に注目す。）さうしませう。だがゲルダはこゝを片付てけくれ。

ゲルダ　なぜなの。わたしこんなここにひゞり置かれるのはいやだわ。それは越して來てからなら、落着いてここにだつてゐられるけど。

壻　ふん、こはがるなら三人で遣るでしよう。（三人共に退場）

（舞臺空虛なり。風吹き荒れて窓々皆鳴り、煖爐も音を立つ。背景の扉開閉し、卓の上にありし紙室内に散亂す。臺の上の棕櫚の木風に揉まる。寫眞の額一つ壁より落つ。舟底の椅子自ら搖く。〇倅の聲。かあさん。〇續きて同じ聲。窓をおしめよ。〇間。）

母　（手に手紙を持ちて讀みつゝ、あら〳〵しく登場。）おや、ごうしたのだらう椅子がいごいてゐる。

壻　（跡につきて登場。）なんです。何が書いてあるのです。お見せなさい。遺言狀ですか。

母　戸をおしめよ。吹き飛ばされてしまふぢやないか。わたしいやな匂がしてたまらないと思つて窓を一つあけたら、これなのだ。〇なに、遺言狀ぢやないの。フリイドリヒにあてた手紙で、中にわたしの惡口が書いてあるの。お前さんのも。

壻　ごれ、お見せ。

母　いゝえ。只お前さんの氣持を悪くするだけだわ。わたし破いちまふ。あの子が見附けなかつたのがしあはせだ。(紙を引き裂き、爐中に投ず。)あゝ。あの人は墓の中から出て來て物を言ふのだ。これでは死んではゐないこいふものだ。わたしこゝに住まつてはゐられないわ。わたしが殺したつて書いてゐるの。讃だわ。そんな事はしはしないわ。あの人は腦溢血で死んだのだ。お醫者が證明してゐる。そればかりぢやない、まだいろんな事を書いてゐるの。皆讃ばかりだわ。わたしのお蔭で破産したのだつて。ねえ、アクセルさん、みんなで早くごこかへ越してしまひませうね。わたし、我慢が出來ないから。ごうぞさうすると云つて頂戴、ね。○あら、あの椅子のいごくのを御覽。

壻　なに、あれは風でいごくのです。

母　ねえ、ごこかへ越してしまひませうね。さうすると云つて頂戴な。

壻　さうはいかないね。わたしはゲルダに遺産が附いてゐるこことだこと思つた。あなたなんぞもさうらしく見せかけて、わたしを引き寄せたのだ。さうでなきや、わたし結婚なぞしはしない。だが、かうなつて見ればしかたがない。わたしが瞞された壻だ、そして無財産にせられた壻だと云ふことを承知してゐて下さい。そこで一しよになつてごうにか暮しを立てゝいかなくちやならない。一しよに儉約するのですね。あなたは力一ぱいすけてくれなくちや。

母　ではわたしに自分の家の女中になれこいふのね、それはいやだわ。

堺　だつて已むを得ないこなれば。

母　いゝえ。お前さん悪黨だわ。

堺　ふん。恥を知れ。

母　人を女中にしようなんて。

堺　女中になつて見るがいゝ。さうしたら、これまで自分の使つてゐた女中がどんな目に逢つてゐたかわかるだらう。腹をへらしてふるえてゐたのだ。それ程の目にはあなたは逢はずに濟むのだ。

母　わたしには貯金の利足があるからね。

堺　それで間借をすれば、屋根裏住ひしきや出來ない。みんなでこゝにぢつとしてゐれば、屋賃だけは出るのだ。若しあなたなんぞがぢつとしてゐないと云へば、わたしがお暇をするだけだ。

母　ではゲルダを見棄てゐると云ふのね。では初から愛情も何もなくつて貰つたのだわ。

堺　ふん。それはあなたの方がわたしより好く御存じの筈だ。わたしの胸の中でゲルダのゐる筈の場所へ、はたから來てゐすわつたのはあなたぢやないか。只寢る時だけ、ゲルダはわたしのそばにゐることが出來るのだ。そして子供が出來ようものなら、それも取られるにきまつてゐる。ゲルダはまだ知らない。なんにも知らない。ですがね、これまで夢遊病のやうにふらついてゐたゲルダが、もうそろ〳〵目を醒ます頃ですよ。氣をつけておいでなさい。あれが目を醒ませば。

母　アクセルさん。わたしやつぱりお前さん達こ中好くするわ。わた

し別れるのはいやだから。わたしひとりぼつちでは暮せないから。わたしごんな事でもお前さんの云ふやうにするわ。ですけど毎晩あの長椅子に寢るこだけは。

堺　所があれに寢て貰ふのです。此部屋に寢臺を入れて家を座敷なしにするこは、わたしが不承知だ。ごうぞさう思つて下さい。

母　ではわたし外の部屋を貰ふわ。

堺　いゝえ。そんな贅澤を言ふやうな世帶ではないのです。それに此部屋はなか〳〵上等だ。

母　いやだわ。わたしごうしてもいやだわ。あの長椅子は血腥い俎だもの。

堺　何を口走るのです。たつていやなら、ひとりで屋根裏へお越しなさい。それか尼寺なり、貧院なりへおいでなさい。

母　あゝ。わたし降參するわ。

堺　さうです。さうなくてはならないのです。

（間）

母　ねえ、殺されるのだつて手紙に書いて置くなんざひどいぢやありませんか。

堺　さうさね、人殺しにもいろ〳〵ある。あなたのやうにして殺せば、刑法に明文がないから都合がいい。

母　あなたのやうですつて。己達のやうこでも云つたらいゝでせう。なぜこ云つて御覽なさい。お前さんが手傳つてくれたのだ。あの人に腹を立てさせられるだけ立てさせて、ごうしていゝかわからない

やうにしちまつたのはあなただわ。

堺　それはあの人がわたしの進んでいく道に立ち塞がつてゐて、わきへよけようとしなかつたからだ。だからわたしは衝き退けた。

母　なにわたしだつてお前さんばかし悪く云ふことは出來ないわ。だけれどお前さんを怨まなくつちやゐられない事がたつた一つあつてよ。お前さんがわたし達を、此内の家庭から外へおびき出してさへ下さらなかつたら、こんな事にはならなかつたのだわ。わたしあの晩は忘れられないわ。わたし達が始てあなたの内へ往つて、立派な食卓に就いた時、外の畠から聞えた聲のおそろしかつたことつてありませんわ。氣違病院か牢屋を脱け出した人の聲のやうだつたわ。お前さん、覺えてゐるでせう。あれはあの人だつたわ。闇夜の雨の中を、烟草を作つてある畠をうろつきながら、女房子供の行方を探してゐたのだわ。

堺　なんだつて今になつてそんな事を言ふのです。それにあの人だつたかわかりもしないに。

母　いゝえ手紙にちやんと書いてあつたの。

堺　さうした所が、構はないぢやないか。それにあの人だつて天使ぢやなかつたから。

母　そりや天使ぢやなかつたわ。だけれど人らしい心持はあつたわ。お前さんなんぞに比べると。

堺　はゝあ。大ぶ相場が狂つて來たやうだ。

母　でもおこらないで下さいよ。ごうせ中を好くしなくちやならない

のだから。

堺　それはさうですとも。わたし共はさうしなくちやならないのだ。運命の要求だから。

（奥より嗄れたる聲にて叫ぶ。）

母　あら。お聞。あの人の聲だわ。、

堺　（あららかに。）あの人とは誰だと云ふのです。

（母耳を聳つ。）

はてな、誰だらう。はゝあ、フリイドリヒだ。又酔つぱらつたのだ。

母　あゝ。フリイドリヒでせうか。あんまりあの人の聲に似てゐたもんだから。わたしほんたうに。ああ遣り切れないわ。一體あの子、どうしたといふのだらう。

堺　往つて見るがいゝでせう。ごら書生めが酔つぱらつて。

母　さう口ぎたなく云はないで下さい。とにかくわたしの子だから。

堺　さやうさ。困つたわけだ。（時計を出して巻く。）

母　なぜ時計を見るの。夕御飯までゐない積り？、

堺　御免です。白湯（さゆ）のやうな茶を飲んだり、脂肪酸の出來たアンショビイだのオオトミイルの粥だのを食つたりすることは、わたしには出來ない。それに相談會もあるし。

母　なんの相談會。

堺　あなたの知らなくていゝ取引です。それとも姑といふ資格で干渉でもしはじめるのですか。

母　だつて内へ歸つた始ての晩だのに、ゲルダに留守番をさせようと

ペリカン

いふの。

堺　それも餘計なお世話です。

母　あゝ、さうなの。それでわたしだのわたしの子供だのが、これからごんな目に逢ふのだかわかるわ。もう被つてゐた面を脱ぐのね。

堺　えゝ、もう脱ぐのです。

第二幕

（同じ場面。舞臺の背後にてゴダルド作ジョスランの子守歌を奏す。ゲルダ卓に倚りゐる。長き間。）

倖　（登場）ひとりかい。

ゲルダ　あゝ。かあさんは臺所にいらつしやるの。

倖　アクセルは。

ゲルダ　相談會があるつて往つちまひなすつたの。少しこゝにゐて話して頂戴な。寂しいから。

倖　（腰をかく）さうさなあ。なんだか、僕とお前とはしんみり話なんかしたことはないやうだなあ。なんでもかう、同じ内にゐながら、お互によけて通つてゐたやうな工合で。まあ、氣が合はなかつたのかなあ。

ゲルダ　それはねえ、兄いさんはおとうさんがたで、わたしはかあさんがただつたから。

ペリカン

伴　ふん。ところが、どうかするど、そいつがこれから變るかも知れないぜ。お前、一體おこうさんはどんな人だつたか知つてゐるかい。

ゲルダ　兄いさん。をかしな事を聞くのね。だが、さう云はれて見るど、わたしいつもかあさんの目でおこうさんを見てゐたやうだわ。

伴　それにしてもおこうさんがお前をかはいく思つてゐたことは知つてゐるだらうな。

ゲルダ　さあ。若しわたしをかはいく思つてゐたのなら。なぜわたし達が約束の出來ないやうにしようどしたり、跡では破談にさせようどしたりしなすつたでせう。

伴　それか。アクセルはお前の行末を頼まれる人間ではないど見てゐたからさ。

ゲルダ　そんなかんちがへをなすつたから、かあさんに出て行かれておしまひなすつたのだわ。

伴　あの時アクセルはかあさんに出ろど云つて勸めただらうな。

ゲルダ　えゝ。私達二人で勸めたわ。おこうさんはわたし達の中を裂かうどなすつたから、思ひ合つた中を裂かれるのがどんなにつらいものだか、思ひ知らせて上げようど思つたのだわ。

伴　さうだ。それがおこうさんの命を縮めたのだ。お前は知るまいが、おこうさんはお前のためを思つてゐたのだ。

ゲルダ　あの時、兄いさんはおこうさんの所にゐたのだから知つてゐるでせう。おこうさんはなんど仰やつて。どう思つてお出なすつて。

伴　おこうさんがごの位苦に病んだか、僕は詞で言ふことは出來ないよ。

ゲルダ　かあさんの事をごう云つて入らつしつて。

伴　なあに、口に出してはなんこも云ひなすつたのではないよ。だがね僕はあれを見たから、生涯女房は持たない。

（間。）

ごうだ、お前達の中は。

ゲルダ　それは一しよにならうこ思つた人こ一しよになつたのだから悪からう筈はないわ。

伴　そんなら此内に歸つた最初の晩に、なぜお前に留守番をさせるのだ。

ゲルダ　それは相談會があるのだもの。取引の用が。

伴　料理店でかい。

ゲルダ　えゝ。料理店ですつて。兄いさん知つてゐるの。

伴　なに、僕はすつぱぬく氣で云つたのぢやない。お前知つてゐるのかこ思つた。

ゲルダ　（俯向きて兩手にて顔を押さへ泣く）あゝ。わたし悔やしいわ。

伴　勘忍しろ。僕はお前にせつない思をさせようこ思つたのぢやない。

ゲルダ　だつてせつないわ。死んぢまひたいやうだわ。

伴　一體なぜ新婚旅行をあんなに早く切り上げたのだ。

ゲルダ　取引の事が心配だこ云つて、いらくしたの。それにかあさ

んにも逢ひたかつたやうなの。これまでもかあさんがゐなくちや落着かなかつたのだもの。

（二人目を見合す。）

伴　さうか。

（間。）

途中で喧嘩はしなかつたか。

ゲルダ　いゝえ。

伴　かはいさうに。

ゲルダ　なんですつて。

伴　なに、お前も知つてゐる筈だ。かあさんは物を知りたがる癖がある。それに遠距離電話を使ふことは上手だからな。

ゲルダ　まあ、では探偵をなすつたのね。

伴　いつだつてするのだ。おほかた今も此話を戸の外で聞いてゐるだらう。

ゲルダ　兄いさんはかあさんの事を悪くばかり思ふのだもの。

伴　お前は又好くばかり思ふのだ。一體なぜなんだ。どんな女だと云ふことは知つてゐる癖に。

ゲルダ　いゝえ。知らないわ。知りたくないわ。

伴　さうだと別問題だ。知りたくないのだ。では知つて都合の悪い利害問題が伴なつてゐるのだな。

ゲルダ　待つて頂戴、兄いさん。ほんとうはわたしちやんと知つてゐるの。わたしは夢遊病とかのやうに、なんだかわからずに暮してゐ

ペリカン　るのだわ。だから喚び醒ましてもらひたくないの。目が醒めると生きてゐられないかも知れないから。

伴　お前なんざ、まだ考へて見たことはないだらうが、人間といふものは皆夢遊病のやうに、何か云つたりしたりしてゐるのだ。僕はお前の知つてゐる通り、法律の本を讀んでゐる。刑事の判決例を見ると、よく重罪を犯した人の心理狀態が知れる。大抵なぜするかわからずにしてゐる。そしてする筈ですると思つてゐる。正當だと思つてするのだな。そして目が醒めるのは、罪の發覺した時なのだ。あれは夢だと云つても好からう。夢でないまでも、眠つてゐることはたしかだ。

ゲルダ　そんならわたしを眠らせて置いて頂戴。それはごうせわたし目が醒める時があるのでせう。しかし其時をなるたけ跡へ延ばしたいわ。あゝ。わたしにわからなくつて、そしてなんだか影法師が透いて見える樣な、いろんな事があるわ。兄いさんだつて子供の時におほえがあつたでせう。何か本當の事を言ふ人があると、其人は意地惡だと云はれるの。わたしなんぞも何か惡い事を惡いと云ふときつと「まあ、意地の惡い子だ事」と云はれるの。それからわたし惡いと思つても惡いと云はないことにしたの。そして好い子だと云つて譽められるやうになつたの。それからわたし心に思はない事を言ふやうになつて、そして人づきあひが出來るやうになつたのだわ。

伴　（冷かに。）それは人はお互に弱點や缺點を隱しあはなくつちやならない。それが一應の道理だ。しかし一歩を進めると詐（へつら）になる、い

ペリカン

くぢなしになる。詰まり、どうしていゝかわからない。だが或る場合には「所謂歯に衣きせぬ一言」が人の義務なのだ。

ゲルダ　ちよつと。少し默つてゐて。

伴　うん。默つてゐよう。

（間。）

ゲルダ　あゝ。やつぱり物を言つてゐる方がいゝわ。只、今の事はよしてね。兄いさんが默つてゐても兄いさんの思つてゐることはわかるわ。一體人は一しよになると何か話すわね。こめごもなく話して、そして自分の思つてゐる事は隱してゐるわね。何かを忘れようとして自分をほかさうとして話すのだわ。誰でも何か新しい事を聞かうとする。外の人の事を聞かうとする。そして自分の事は隱してゐる。

伴　かはいさうに。

ゲルダ　何が一番せつないか知つてゐて。（間。）生涯の幸福といふものがなんでもなかつたといふことがわかつた時。

伴　こう〳〵白狀してしまつたなあ。

ゲルダ　おゝ、寒い、少し煖爐をお焚でないか。

伴　お前も寒がつてゐるかい。

ゲルダ　わたしいつも、お腹が透いてゐるの。

伴　お前もかい。妙な内だなあ。〇所で薪を一本くべようものなら一週間位言はれるからなあ。

ゲルダ　でも薪がはいつてゐるかも知れないよ。母さんはよくわたし

達の氣休めに薪を入れて置くから。

倅　（煖爐の側に往き、爐の扉を開く。）ほんに二三本はいつてゐる。（間。）おや、これはなんだ手紙だ。破いてある。たきつけに丁度好い。

ゲルダ　まあ、焚くのはよしませうね。二人でこめごのない小言を聞く事になるから。それよりか、こつちへ來てお掛けなさいな。又話すから。

（倅往きて腰をかけ、手紙を卓の上に置く。○間）

ゲルダ　なぜおごうさんがあの人をあんなに憎んだか、兄いさんには分つてゐるでせうか。

倅　それはわかつてゐるさ。アクセルはおごうさんのためには妻子を奪つた男だ。そのお蔭でおごうさんは寂しい身の上になつた。○おごうさんは最初にアクセルの食物が自分のより好くしてあるのに氣が附いた。それからお前達はよく座敷に立て籠つて本を讀んで聞せ合つたり　演奏をしたりした。お負に其本なり曲譜なりが、きつごおごうさんの嫌ひなものだつた。○そんな工合におごうさんは段々に家の中を蠶蝕せられて、こうゝゝゐごころがなくなつて、夜、酒を飲みに出るやうになつたのだ。

ゲルダ　まあ、さうでせうか。そんな事ごは、わたしちつごも知らなかつたわ。おごうさんはお氣の毒だつたわねえ。なにしろ、立派な、世間から譽められてゐる兩親のあるのは、子供の幸福なのだから。あの銀婚のお祝の時の事を、兄いさんまだおぼえてゐて。あの時の

演說だの、人の朗讀した詩だの。

伴　うん。おぼえてゐる。あれは嬉劇だつたのだ。幸福に充ちた家庭だのなんのと云つたつけなあ。犬にも劣つた生活をしてゐたのに。

ゲルダ　兄いさん。あんまりひどいわ。

伴　どうもいたしかたがないなあ。お前だつてあの時の内輪は知つてゐたぢやないか。かあさんが窓から飛び降りようとするのを、二人で抱き附いて留めたことがあるだらう。お前だつて忘れやすまい。

ゲルダ　あゝ。そんな事はもう云はないで下さいよ。

伴　あれにはいづれ一通りでないわけがあるのだ。それを我々は知らないのだ。お前達が出て行つた跡で、僕ばかりがおとうさんに附いてゐた時、おとうさんは度々僕にうちあけようとしたらしい。しかし詞が口に出なかつた。僕は今でも折々おとうさんを夢に見るが。

ゲルダ　それはわたしも見てよ。夢ではおとうさんがいつも三十位でね。優しい顏をしてわたしを見ていらつしやるの。そしてなんだか思つていらつしやるやうだが、それがわたしにはわからないの。どうかするとかあさんもそばにいらつしやるの。おとうさんはかあさんにもおこつてはいらつしやらないの。とにかくかあさんを愛してはいらつしやつたのだわ。しまひまで。兄いさんおぼえてゐるでせう。銀婚のお祝の時も、おとうさんは美しい演說をなすつたわ。「己はお前に深く感謝する、とにもかくにも、深く感謝する」と仰やつたわねえ。

伴　さうだ。「とにもかくにも」だ。あの一言は多くを含んでゐる。しか

し一切を含ませるには、あの一言は足りないのだ。

ゲルダ　だつて美しいお詞だつたわ。さにかくかあさんには大功があるわ。家政を取つてゐなすつたのだから。

伴　所が、それが大なる疑問だて。

ゲルダ　ごうして。

伴　まあ考へて見ろ。今の所、お前達は萬事一しよになつて遣つてゐるのだなあ。だが、問題が勝手元の事に觸れると、そこにうちあけてない秘密がある。フランスでフラン、マソンヌリイといふ秘密結社があるが、其なかまの内證は外の人にはわからない。イタリアにはカモルラといふ悪黨の組合があるが、人にわからない合詞を使つてゐる。かあさんの家政は、なんだかそのマソンヌリイやカモルラの臭味がある。内のあのグレエテばあさんだな、あれは僕の親友だが僕はあいつに勝手元の事を聞いて見たことがある。「一體内のものを食ふと、なぜかうのべつに腹がへつてゐるだらう」と云つて、僕は聞いたのだ。すると、あのおしやべりめが、ぐつとも、すつとも云はない。そしてお負にいやな顔をするのだ。ごうだ。わかるかい。

ゲルダ　（單純に。）わからないわ。

伴　ふん。して見るとお前もやつぱりマソンヌリイのなかまだな。

ゲルダ　だつて兄いさんのさう云ふのが、又わからないから困るわ。

伴　僕は度々考へて見たのだ。ひよつとすると、おとうさんは此カモルラの犧牲になつて死んだのだ。此カモルラには氣がついてゐたに違ひないが。

ゲルダ　なんだか、兄いさんの云ふことは、氣のへんになつた人の云ふことのやうだわ。

倖　なんでもおごうさんが冗談のやうにカモルラといふ詞を使つたことは度々ある。しかしこう〳〵なんにも言はないでしまつた。

ゲルダ　まあ、おそろしく寒いこと。丸で塚穴の中の寒さだわ。

倖　そんなら、なんと云はれても構はないとして、焚き附けよう。（側にありし裂けたる手紙を取り上ぐ。さて讀むに意あるにあらずして目を紙上に游ばしむ。目は紙上に駐まりて動かずなる。遂に讀みはじむ。）これはなんだ。（間。）「愛する吾兒よ。」これはおごうさんの自筆だ。（間。）はゝあ。僕に遺した手紙だ。

（讀みつゝ椅子に腰を掛け、しづかに讀みつゞく。）

ゲルダ　何を讀んでゐるの。なんなの。

倖　身の毛のよだつ話だ。

（間。）

ゲルダ　なんだかさう云つて頂戴な。

（間。）

倖　あゝ我慢が出來ない。（ゲルダに。）亡くなつたおごうさんが僕に遺してくれた手紙なのだ。（又讀む。）あゝ。己はやつと目がほんたうに醒めたのだ。

（起ちて長椅子に身を偃し、悲痛のために呻吟す。されど手紙をば措かずして、かくしに入る。）

ゲルダ　（兄の側に跪く。）兄いさんどうしたの。なんだか、さう云つ

て頂戴な。病氣になつたのぢやなくつて。どうしたの、どう。

伴　（起きあがる。）己はもう生きてはゐられない。

ゲルダ　さう云つて頂戴てば。

伴　想像も出來ない事だ。（やや我に復りたる如く、立ちあがる。）

ゲルダ　なんだか知らないけど、思違へといふものもあるものですわ。

伴　（いら〳〵して。）なに、思違へなものか。おとうさんは墓の中から譫を言つて聞しやあしない。

ゲルダ　でもおとうさんは腦が惡くなつて、さうでない事をさうだと思つていらつしやつたかも知れないわ。

伴　さうだ。やつぱりカモルラだ。さあ言つて聞せよう。聽けよ。

ゲルダ　なんだか、兄いさんの云はうと思ふ事は、前からわかつてゐるやうだわ。そしてわたしには本當とは思はれなささうだわ。

伴　お前は本當の事を本當でないと思つてゐたいのだ。己は云つちまふぞ。己達をうんだ女はごろばうだ。

ゲルダ　いゝえ。譫だわ。

伴　うそなものか。會計をしてゐて金を盜んだ。商人の書附を僞造した。最下等の品物を最高價に買つた體にした。料理をしてゐるうちに、一人前だけは先へ食つてしまつて、殘りものを煮返して內ぢゆうのものに食はせた。牛乳は上皮のすつかり出來るまで置いて、上皮は自分で食つて、子供には脫脂乳を飲ませた。それだから己もお前も一人前の體になれなかつた。病身になつたのだ。いつも腹がへつてゐたのだ。薪や炭の代をも盜んだ。それだから己達はいつも寒

ペリカン　さにいぢけてゐたのだ。おこうさんにそれがわかつて、おこうさんは意見をなすつた。すると、改心すると云つて置きながらやつぱり盗んだ。そして日本醤油だの、唐辛子だので味を附けてごまかした。

ゲルダ　罎だわ。

伴　默つてゐろ。カモルラだ。まだ一番ひどい事が殘つてゐる。あの野郎だな、お前の夫だな。あいつは初からお前を愛してはいないのだ。あいつは前からお前の母親の情夫だつたのだ。

ゲルダ　まあ。

伴　おこうさんはそれを知つた。そればかりではない。あいつがお前の母親、己達の母親から金を引き出してゐるのを知つた。其時あの野郎は善後策として結婚の申込をしたのだ。これが大體の筋だ。委しい事は思つて見るがいゝ。

ゲルダ　（ハンケチにて顔を掩ひ、泣く。）さうだわ。それはもうちやんとわかつてゐたの。心の奥でわかつてゐたの。それでゐて、わたしわからせたくないので、自分で自分を瞞してゐたの。わからせるのが、あんまりつらいもんだから。

伴　そこでどうしよう。僕はお前をこのけがらはしい中から救ひださなくてはならないのだが。

ゲルダ　つれて逃げて下さいな。

伴　どこへ。

ゲルダ　それはどこへ往つていゝかわからないわ。

伴　そんならぢつとしてゐて成行を見るのだ。

ゲルダ　母にあらがふことは出來ないわね。神聖なのだから。

伴　神聖も糞もあるものか。

ゲルダ　そんな事を言はないものだわ。

伴　獣のやうに陰險な女だが、利己主義で目のくらんでゐる處のあるのがつけめだ。

ゲルダ　やつぱり逃げませうね。

伴　どうもどこへと云ふあてがない。いゝや。こゝにゐて、あの野郎があの女を追ひ出すのを見てゐるようぢやないか。○待てよ、もう野郎歸つて來る頃だ。○おい。しつかりしろよ。これから二人でマソンヌリイを遣るのだ。合詞(あひことば)は「花よめの打擲(ちやうちやく)」とでもしようか。

ゲルダ　時々氣を附けてくださらなくちや、わたし約束を忘れてしまつてよ。わたし何もかも忘れたいのだから。

伴　お前も僕も性命の根柢から掘り返された人間だ。何一つ世の中に尊重すべきものがない、仰ぎ見るべきものがない。ままよ。はらいせに生きてゐよう。おとうさんの寃(ひじつ)を雪(そ)ぐために生きてゐよう。

ゲルダ　えゝ。相手に思ひ知らせませうね。

伴　うん。復讐だ。（舟底椅子に腰かく。）

（壻登場。）

ゲルダ　（芝居の役を勤むるやうに。）おや。相談會は面白かつたでせうね。何か御馳走があつて。

壻　會は延期になつた。

ゲルダ　會ごは縁切りですつて。

堺　いゝや、延期ご云つたのだ。延ばしたのだ。

ゲルダ　ではさしあたり會なんぞの事をよして、内の事をして下さるでせうね。

堺　なんだか、ひごく上機嫌だなあ。勿論フリイドリヒ君が機嫌を取つてくれたのだらうが。

ゲルダ　えゝ。兄いさんごマソンヌリィをして遊んでゐますの。

堺　ぶつそうな遊だ。

ゲルダ　それからカモルラをしますの。それからワンデッタを。

堺　（不快に感ずる樣子。）なんだか變な事ばかし云ふな。ごうしたごいふのだ。何かお前がたは秘密があるのかい。

ゲルダ　あなただつて秘密があるでせう。それごもなくつて。

堺　ごうもへんだなあ。誰か來やしなかつたか。

伸　えゝ。ゲルダご僕ごで神おろしをしたのです。來たのはあの世の人です。

堺　もう冗談はいゝ加減にしようぢやないか。あまりしつこく遣るご始末が悪い。だが、ゲルダは今のやうに機嫌を好くするがいゝのだ。ごうもごかく不機嫌でいけない。

（嬉ゲルダの頰を撫でむごす。ゲルダ身を引く。）

お前己をこはがるのか。

ゲルダ　（眞面目になる。）いゝえ。ちつごもこはかないわ。恐怖に似て恐怖でない感情があります。口を出さないで氣色にあらはれる感

情があります。氣色にあらはさないで擧動に見える感情があります。氣色にも擧動にもあらはさない感情を、奥深く包んでゐる詞があります。

（婿ぎくりこする。しよさいなさに棚の書籍をいぢりゐる。）

伴　（舟底椅子より立ちあがる。椅子は後に母の登場するまで搖き止まず。）そろ〳〵オオトミイルの御案内がある頃だ。

壻　一體。

母　登場。舟底椅子の搖くを見て恐怖し、又思ひ返す。）みんな御飯においでな。

壻　御免だ。オオトミイルなら犬に遣るがい〻。勿論飼犬があればだ。

それこもライならきれに包んで腫物を蒸したらごうだらう。

母　でも内はお金がないから儉約しなくつちや。

壻　間税二萬クロオヌの家は貧乏ぢやない。

伴　所が、そいつを返さない奴に貸しちやあ、だめだ。

壻　それはなんの話だ。小僧さん氣がへんになつたのかな。

伴　さあ。もこは氣がへんになつてゐたのかも知れんて。

母　御飯には來ないの。

ゲルダ　さあ〳〵皆さん參りませう。オオトミイルなんかこはがらないで。わたしがビイフステエキを御馳走します。

母　なに、御前が。

ゲルダ　え〻、わたしが御馳走します。

母　まあ。

ゲルダ　（客を案内する手つきをなす。）さあ、ごうぞ。

壻　（母に。）一體これはごうした事だらう。

母　係蹄（わな）に掛けるのかしら。

壻　さうかも知れない。

ゲルダ　さあ〳〵。ごうぞ。

（皆戸の方へ歩む。）

母　（壻に。）あの椅子がいごいてゐたのを見て。あの人の椅子が。

壻　そんな物は己は見ない。己はちよいと外の事を見たて。

第三章

（同じ場面。舞臺の背後にてヲルフ、フエルラリの「エル、ザアハテ、ミユル」のワルツを彈奏す。○ゲルダ手帳を開き、讀みる。）

母　（登場）あれを覺えてゐるかい。

ゲルダ　あのワルツですか。えゝ。

母　お前の式の晩にひいたつけね。わたしが夜明まで踊つた時。

ゲルダ　さう。（問ふ調子。）○アクセルさんはどこへ往きましたの。

母　どうしてそれがわたしに知れるものかね。

ゲルダ　さう。（問ふ調子）もう喧嘩をなすつたの。

（間。二人の表情。）

母　何を讀んでゐるのだい。

ゲルダ　かあさんの料理法の手帳。どうしたのでせう、何か煮るこばかし書いてあつて、何分間こも何時間こも書いてありませんが。

母　（困る様子。）それはいろ〳〵だからね。ちよいこ煮たのを好く人もあるし、長く煮たのを好く人もあるし。

ゲルダ　わからないわ。わたし煮物は時間が肝心だこおもふわ。きちんこ煮るだけ煮て、すぐに食卓に出さなくてはおいしくはないわ。煮たのをうちやつて置けば、殘りものこ同じだわ。〇いつでしたか、かあさん小鳥を蒸燒にしてゐましたね。それが丁度三時間かかりましたの。初の一時間は内ぢゆういい匂がしましたの。それから勝手がひつそりしてゐて、皆が食卓に就いた時は、丸で匂のない、空氣をたべるやうな鳥がお皿にのつてゐましたつけ。あれはどうしたのでせう。

母　（困る様子。）へんぢやないか。

ゲルダ　それからあのソォスですね、まだ澤山あつたのが、さつき見ればなくなつてゐました。誰がたべましたの。

母　知らないよ。

ゲルダ　わたしは知つてゐます。聞いて見たから。そればかりぢやない、いろ〳〵な事を知つてゐます。

母　（詞を遮るやうに。）それはお前の知つてゐる位の事は皆わたしだつて知つてゐます。お前の半わかりで、わたしに指圖をしようこし

たつてだめ。料理法はわたしがお前に教へるのだから。

ゲルダ　日本醤油と唐辛子との使道でせう。それはもうわたしだつて出來ますわ。〇お客に何か出す時は、誰もたべないやうにして出して、翌日に殘すことも知つてゐます。ごうかして人を呼ぶ時は「生憎けふは勝手の大掃除で」と、ことわりの言はれる日に呼ぶことも知つてゐます。ですからもうけふから勝手はわたしがまかなひますわ。

母　（怒る。）ではわたしはごうなるの。お前の女中になるのかい。

ゲルダ　そればわたしはかあさんの女中で、かあさんは又わたしの女中でなくつちやいけないわ。お互にすけるのだから。〇おやアクセルさんだ。

堺　（太い杖を持ちて登場。）さあ。長椅子はごうだつたね。

母　ごうにか、かうにか寢られたわ。

堺　（威嚇するやうに。）宜しい。惡かつたら惡かつたと、はつきり云つて貰はう。なんでも不足があるなら一々聞かう。

母　はゝあ。わかつたわ。ごうしようと云ふのだか。

堺　わかれば結構だ。そこでわたしとゲルダはね、總菜では腹がへつてならないから、食ひに出る事にしたから、さう思つて貰はう。

母　そしてわたしは。

堺　あなたですか。あなたは梱包した荷物のやうにふくらんでゐるぢやありませんか。もう其上にはあんまりたべなくても好からう。一體養生のためには、あなたはこれから、わたし共が痩せてゐるやう

に痩せなくちやいけない。こ、こ、ろ、でこ。ゲルダ。お前ちよつ、こあつちへ往つてゐろ。○そこで一つ煖爐を焚き附けて貰はう。

（ゲルダしづかに退場。）

母　（怒のあまりに震慄しつゝ。）薪はくべてあつてよ。

壻　いや。くべてあるのはたつた二三本だ。煖爐が一ぱいになるやうに薪を一抱持つて來て貰はうっ

母　（躊躇す。）ではお金を燃してしまふの。

壻　なに、薪を燃すのだ。暖くなるやうに。早くして貰はう。

（母躊躇す。壻杖にて卓を打つ。）

さあ。一、二、三。

母　わたしもう薪は一本もないかこ思ふわ。

壻　ぢやあ、あなた讃を衝くのか、さうでなけりや、あなた金を盗んだのだ。たつたこなひだ一コルド買つたのだから。

母　それがお前さんの地金なのね。

壻　（舟底椅子に掛く。）さうですこも。何もこれまで皮を被つてゐなくても好かつたのだが、年上で世馴れたあなたに瞞されて、年のいかないわたしが餘計な遠慮をしてゐたのだ。早く薪を持つてお出。早くしないこ。

（壻杖を振りあぐ。母急ぎ退場。直ちに薪を抱きて登場。）

宜しい。そこで火をかつかこ焚くのだ。見せかけの火ではいけない。

さあ。一、二、三。

母　まあ、亡くなつたあの人そつくりだわ。お前さんが其椅子に掛け

てゐて、そんな事を言ふこ。

壻　焚き附けないか。

母　（屈從す。されご憤に堪へざる樣子。）今焚き附ける所だわ。

壻　さうだ。あなたが焚いてくれる間に、わたし共は食事をして來る。

母　ではわたし何をたべるの。

壻　あなたのオオトミイルはゲルダが臺所に出して置いた箸だ。

母　皮を取つた跡の牛乳でこさへたのね。

壻　これまであなたが皮を皆たべてしまつた報だ。

母　（沈欝なる聲。）ではわたし出て行くわ。

壻　さうはさせない。戸に鎖を卸して置く。

母　（小聲。）では窓から飛んで死ぬるわ。

壻　さうさね。それもよからう。一體もつこ早くお前さんがさうしてくれるこ、いろんな人が助かつたのだ。さあ。詰まらない事を言はずに、火をおこすのだ。吹くのだ。さうだ。わたし共が食事をして來るまで、こゝで待つてゐて貰はう。

（壻退場。○間。）

（母舟底椅子の搖くを抑へこごむ。さて戸に耳をつけて聽き、次いで煖爐の中よりまだ火の附かぬ薪二三本を取り出し、長椅子の下に置す。）

（倅醉を帶びて登場。）

母　（ぎくりこす。）誰かこおもつた。

倅　（舟底椅子に掛く。）僕です。

母　ごうしたの。

伴　ええ。ごうも工合は悪いですよ。もう長くはなささうです。

母　それはお前、氣のせいだよ。○そんなにゆさぶらないでゐておくれ。○まあ、わたしの方を御覽。わたしは大ぶ年を取つた。わたしは長い間子供に對する義務を盡して、骨を惜まずに働いた。さうぢやないか。

伴　詰まらない。およしなさいよ。○ペリカンは雛に胸の血をのませたことはないのです。あれは譚だと、動物學の本に書いてあります。

母　ではお前、何かこれまでの事に不足があつたのかい。

伴　詰まらない。ねえ、かあさん。わたし醉つてゐないと、あなたがそんな事を聞いても、正直に返事をすることが出來ないのです。勇氣がありませんからね。だが、今は醉つてゐます。醉つてゐるから云ひます。それ、かあさんはおごうさんの手紙を盗んで、破いて、煖爐の中へ入れたでせう。僕あれを見附けて讀みました。

母　わからないわ。何を言つてゐるのだい。手紙といふのはどんな手紙。

伴　おきまりの譚だ。かあさんはおぼえてゐますか、僕に始て譚を衝くことを教へた時の事を。僕はまだ舌もろくに廻らなかつたのです。おぼえてゐますか。

母　そんな事をおぼえてゐるものかね。○ゆさぶるのはおよしよ。

伴　そんなら僕の子供の時、僕の前で譚を衝いたことをおぼえてゐますか。かあさんにはごれをおぼえてゐていゝかわからなかつたでせ

う。○ちよつと僕はこんなのを思ひ出します。僕は小さくてピアノの下に隠れてゐました。すると小母さんがお客に來て、かあさんはそれをピアノのそばへ連れて來ました。そして三時間立てつづけに讃を衝きました。僕は出場を失つて、それを皆聞いてゐました。

母　讃だわ。

伴　ふん。なんとでもおつしやい。そこでかあさんの僕に始て讃を教へてくれた時の事を言つて聞せませう。一體僕がこんな弱い體になつたのは其時からです。かあさんは僕に乳を飲ませてはくれなかつた。そこで子守女が牛乳で僕を育てた。それから僕が少し大きくなると、其女が僕を姉の所へ連れて行きました。姉は祕密の商賣をする女でした。僕はそいつの所でへんな事を見ました。あの犬を飼つて置く人が、春秋二期に、往來で犬にさせて見せる、へんな事ですね。僕は歸つてかあさんに其事を話しました。僕は四つでした。するとかあさんが、いきなり「讃つ衝き」と云つて僕をぶちました。僕はほんたうの事を言つてはならない、讃を衝かなくてはならない事になりました。子守女はいゝ事にして僕を度々姉の所へ連れて行きました。そして僕が五つになると、子守女めが僕に悪い事を教へました。僕はたつた五つでした（泣く。）○（間。）それから僕はおとうさんやゲルダと一しよに、始終腹をへらして、始終寒がつて暮すことになりました。○そしてやつと今になつて、かあさんが勝手の費用や薪炭の代をごまかしてゐなすつたことを知つたのです。かあさん。あなたは胸の血で子を育てたペリカンだと云ひますね。僕の

此體を見て下さい。あのゲルダの胸廓の狹い體を見て下さい。○かあさん。あなたもおこうさんを殺したことは承知してゐなさるでせう。絶望におこしいれて死なせたのですね。そんな箇條は刑法にはない。妹をもあなたは殺しかかつてゐる。それもわかつてゐるでせう。今では妹にもわかつてゐます。

母　ゆさぶらないでおいで。妹に何がわかつてゐるつて。

伸　聞かなくたつて、あなた知つてゐるでせう。僕には口に出して言はれません。（泣く。）僕がこれだけの事をあなたに言つたのは、實はおそろしい事です。しかしこれは言はなくてはならなかつたのです。僕にはなんだか、醉が醒めたら、拳銃で自分の頭を撃ち拔かなくてはゐられないだらうと思はれてならないのです。それで酒を飲みつづけてゐます。醒めるのがこはくてならないので。

母　いゝから讃のありつたけおいひ。わたしいつまでも聞いて遣るから。

伸　いつだつけおこうさんがおこつてさう云つたことがあります。あなたは大きな讃の塊（かたまり）です。外の子供が物を言ふことをおぼえる代りに、あなたは初から讃をいふことをおぼえました。○それからあなたはいつも自分のなぐさみがしたいのであらゆる義務を拋棄しました。これもおこうさんのお詞でした。いつかゲルダが病氣でひどく容態が悪かつた晩に、あなたはオペレットを聞きにいきました。僕は其時あなたの僕にいつた詞をおぼえてゐます。「いやな事はさうしなくつてもありあまる程ある、何も子供に義理だてをして此上にい

やな思をしなくつてもいゝ」と云つたのです。〇それからいつか夏の三箇月を、あなたはおとうさんを勸めて、パリイで一しよに暮しました。そしてあなたは自分のしたい程のなぐさみをしました。そのためにおとうさんは借金をしました。それはまだいゝとして、留守には僕とゲルダとが女中二人と一しよに此家に置いてありました。おとうさんの寢室には毎晩消防夫がひとり來て寢ました。其脇のあなたの寢室には女中の一人が寢たのです。

母　なぜ其時わたしにさう云はなかつたのだい。

伴　云ひましたとも。あなたが忘れてしまつたのです。其時僕をぶつたことをも忘れてしまつたのです。「いつつけぐちをする」と云つたり、「讒を衝く」と云つたりしてぶつたのです。其時には限りません。

僕が本當の事を言ふ度に、あなたはきつと讒だと云ひました。

母　（新に捕へられて檻に入れられたる獸の如く、圈を畫して室内を歩む。）息子が母親にこんな事を言ふといふことが、世の中にあるだらうか。

伴　なる程世の中にありふれた事ではないでせう。全く不自然ですから。それは僕にもわかつてゐます。しかし僕は一度は言はなくてはなりません　〇あなたは夢遊病者だ。いゝといてゐる間は、呼び醒ますことが出來ない。それだからあなたは改めるといふことが出來なかつたのです。おとうさんがあなたに謂つたことがあります。「お前は拷問に掛けても、自分のした事を白狀したり、自分の衝いた讒を取り消したりはしない女だ」と云つたのです。

母　お前はおごうさん、おごうさんと云ふが、そのおごうさんには闕點がなかつたとお思ひかい。

伸　おごうさんには大闕點がありました。しかしそれは妻子に對してではありません。それに別問題です。おごうさんがどんなに悪くつたつて、あなたがいゝ人になれない筈はありません。○僕の言つた事はあなたの罪悪のすべてではありません。あなたの夫婦關係の上にはまだ〳〵秘密があつたやうです。僕はそれを推測しながらもいつも自分でそれを打ち消さうとしてゐました。此秘密の少くも一部分は、おごうさんがそつくり墓の中へ持つて往つたのです。

母　もう大抵しやべりたい程しやべつたのだらうね。

伸　えゝ。もう僕はいきます、そして酒の醒めないやうに飲み足しです。○僕はごうせ法科の試驗は受けられません。僕は法津といふものを信じません。ごうも僕の目で見れば、法津はごろばうや人殺しが、罪を逃れるに都合のいゝやうに、自分で書いたものとしきや思はれません。一人の正直ものの證言は無効で、二人の讒衝きの僞證は有效です。十一時三十分まで持つてゐた僕の權利が十二時にはなくなつてゐます。僕は書損をしたり、書類の欄外に二三字の書入をしなかつたりしたために、入獄しなくてはならないかも知れません。僕が悪黨になさけを掛けて遣ると、そいつは僕を誹毀罪におとすかも知れません。僕は性命をも、人類をも、社會をも、自己をも、際限もなく侮蔑してゐます。僕はもう此世に生存するために、なんの努力をもしたくありません。

（倅戸の方へ歩む。）

母　お待。

倅　ひとりになるのがこはいのですか。

母　なにね、わたし少し神經質になつてゐるから。

倅　同じ事です。

母　わたしごうも此椅子が氣になつてしやうがないの。亡くなつた人があれに腰を掛けてゐた間ぢゆう、わたしを責めごほしに責めてゐたからね。あの人はわたしの胸を刻む庖刀だつたからね。

倅　およしなさい。あなたには胸なんといふものはないのだ。

母　ごうぞ、あつちへいかないでおくれ。實はわたしもう此家にゐられないかとおもふの。アクセルは悪黨だから。

倅　さうですね。僕も今まであいつを悪黨だとおもつてゐました。だが、今はさうは思ひません。あいつもあなたの罪悪の犠牲です。あいつ年がいかないものだから、あなたに誘惑せられたのだ。

母　まあ。なんといふ口の利きやうだらう。お前此頃きつと品行の悪いものと附きあふのだよ。

倅　品行の悪いものと。さうですね。僕は生れてから品行の悪い者としきや附き合つた事がないのです。

母　ごうぞ、いつてしまはないでね。

倅　だつて、ゐたつてしやうがないぢやありませんか。ゐれば、いろんな事を言つてあなたを死ぬほどいぢめるだけです。

母　それでもいゝからゐておくれ。

伴　はてな。ひよつこするこ、あなた目が醒めかかつたのぢやありませんか。

母　さうだよ、さうだよ。わたし今やつこ目が醒めたの。長い、長い間夢中でゐて。あゝ。おそろしい。なぜ今になるまで誰もわたしを醒ましてくれなかつただらう。

伴　さうですね。誰もしなかつたのは、誰にも不可能だつたからでせう。不可能だつたこするこ、あなた自身にも責任はないのですね。

母　おゝ。今の事をもう一度さういつて聞せておくれ。

伴　あなたのした事は、あなた自身にもさうしきや出來なかつたのだらうこ云ふのです。

母　（奴隷の如く息子の手に接吻す。）何かもつこ云つておくれ。

伴　もうなんこも云はれません。○さうだ。たつた一つあなたに忠告したい事があります。ごうぞもうこゝにゐないで下さい。此内はもう悪くなられるだけ悪くなつてゐます。もうこれ以上に悪くしやうはないのです。

母　さうだねえ。わたし出ていくこにしようよ。

伴　あゝ。氣の毒だなあ。

母　お前ただわたしの事を氣の毒だこだけはおもふかい。

伴　（泣く。）さうおもふのです。僕ひこりでさう云つたここは何遍だか知れません。かあさんは氣の毒な程意地が悪い、今に自分で困るのだこ云つてゐたのです。

母　おゝ。よく云つておくれだつた。ありがたうよ。○もういゝから

あつちへおいで。

倅　ごうでせうね。なほすことは出來ないでせうね。

母　いゝえ。なほるまいよ。不治の病だらうよ。

倅　えゝ。さうです。たしかに不治の病です。

（倅退場）

（母ひとり跡に残る。手を叉きて立つこと良久し。さて窓に歩みより、扉を開き、瞰下す。さて室の中央に戻り、窓に驅けよりて飛びおりむこす。されど思ひかへして已む。此時奥より入口の戸を三度敲く。）

母　おや。誰だらう。誰だつたかしら。（窓の戸を閉づ。）アントレエ。

（奥の戸自ら開く。）

誰だい。誰かそこにゐるのかい。

（倅の別の部屋にて叫ぶ聲聞ゆ。）

あ。あの人だ。煙草の畑をうろついてゐるのだ。まだ死なずにゐるのだ。わたしどうしよう。どこへいかう。

（抽斗附の大卓の背後に匿る。風又起りて、紙室内に散亂す。）

フリイドリヒ。そつちの窓をお締。

（草花を栽ゑたる鉢一つ吹き倒さる。）

窓をお締。わたしさむくてしやうがないわ。煖爐の火はもう消えてしまつたから。

（母電燈に悉く點火す。戸口の戸を鎖す。されど戸は再び風に吹き開かる。舟底椅子風のために搖きはじむ。母圏を畫する如く室

内を歩み、さて長椅子の上に衝つ伏し、顔を聳りかかり布團に埋む。）

（ゲルダ登場。手にオオトミイルの皿を持ちたるが、それを卓上に置く。さて電燈を消して、只一つのみ點し置く。〇ワルツ「エル、ザアハテ、ミュル」の曲聞ゆ。）

母　（醒覺して身を起す。）あかりを消さないでおくれ。

ゲルダ　でも儉約をしなくては。

母　お前たべに出てこんなに早く歸つたのかい。

ゲルダ　アクセルさんはあなたがゐなくてはつまらないのです。

母　やつぱりかい。

ゲルダ　晩御飯を持つて來たからたべて下さい。

母　わたしお中が透いてゐないから。

ゲルダ　罐でせう。お中は透いてゐるが、オオトミイルはたべられないのでせう。

母　なに、ごきたまたべるがね。

ゲルダ　いゝえ。罐です。なんのオオトミイルをたべたことがあるものですか。わたしあなたに是非これをたべて貰ひます。オオトミイルはどうでもいゝのですが、これは返報です。あなたはいつも犬に遣るオオトミイルをこしらへて、それをわたし共にたべさせて、わたし共がたべにくがつて困るのを見て笑つてゐた。あのあなたの笑顔の返報です。

母　わたしには皮を取つた跡の牛乳はたべられない。跡で體が冷えてならないから。

ゲルダ　あなたこれまでは皮を取つて、朝のコオフィイにいれてたべてしまつたのです。○さあ我慢してたべて下さい。(皿を母の脇の小卓の上に移す。)たべて下さい。わたし見てゐるから。

母　どうもわたしにはたべられないよ。

ゲルダ　(身を屈めて長椅子の下より薪を取り出す。)たべなけりや、わたし薪の隱してあつたことをアクセルさんに言つ付けてよ。

母　アクセルさんは、わたしがゐないと、食卓に落着いてゐないと云つたぢやないか。言つ付けたつて、わたしにつらく當る筈がないわ。お前あの式の晩の事をおぼえておいでだらう。わたしがあの人と踊つた時の事を。それ、あの「エル、ザアハテ、ミユル」の篩で。今丁度彈いてゐるわ。(聞え來る第二のルブリイズに合せて口笛を吹く。)

ゲルダ　あんな恥知らずの事をした時の事なんか言ひださない方が、あなたのおためだわ。

母　そしてあの時皆がわたしにあてて一番いゝ詩を朗讀したり、わたしに一番いゝ花束をくれたわ。

ゲルダ　まだそんな事をいふの。

母　あの時の詩を言つて見ようか。わたしまだ諳記してゐてよ。「ギンニスタンの園のうち」と云ふのだつけ。ギンニスタンはペルシヤ語で、天國にある花ぞのだつてね。そこで花の匂を嗅いでペリイが生きてゐる。ペリイには男も女もあつて、幾年立つても年が寄らない

のだこさ。

ゲルタ　あなたそのペリイだごいふのね。まあ、あきれた。

母　でも詩にさう云つてあるのだもの。○井クトル小父さんもわたしに結婚を申し込んだわ。わたしもう一度およめに往かうかしら、お前ごうおもふ。

ゲルタ　本當にさう思つてゐるのだこ、お氣の毒ね。わたし共は皆夢遊病だつたのだが、あなたまだ目が醒めないのね。いつまでも醒めずにゐる積り。人が皆笑つてゐますよ。アクセルさんなんぞもあなたを馬鹿にしてゐるのに、あなたわからないの。

母　さうかい。でもあの人はいつもお前よりはわたしの方を大事にしてゐるぢやないか。

ゲルタ　ではあんなに杖を振り廻して嚇かすのも、大事にするのでせうか。

母　ぶたれるのはお前で、わたしぢやないわ。

ゲルタ　まあ、氣がごうかしてゐなさるの。

母　だつて今夜だつて、わたしが一しよにゐなかつたので、つまらなかつたこ云ふぢやないか。ほんにあの人こ話してゐれば、いつまでも話の切れるこいふこことはないわ。わたしの心持のわかつてくれるのはあの人だけだわ。お前なんざまだ子供で。

ゲルタ　（母の肩を摑みてゆり動す。）目をお醒ましなさいよ。

母　お前なんざまだ一人前の女になつてゐやしないわ。わたしはお前達の母親で、胸の血でお前達を育てて遣つたのだ。

ゲルダ　なに、胸の血で育てるものですか。ゴムの乳首の附いたガラス瓶をわたしにあてがつたのだわ。それから少し大きくなると、わたし鼠入らずへ物を盗みに往つたの。所が、いつもライで燒いたパンの堅くなつたのしきやないから、わたしやつと芥子を附けてたべて、そして咽のひり〳〵するのを酢を飲んでなほしたわ。だからわたしはパン籠と藥味臺のお蔭で育つたのだわ。

母　おや、さう。それぢやお前そんなちつぽけな頃からごろばうだつたのね。大したものだ。そしてそれを話すのを恥だともおもはないの。あゝ。わたしそんな子供の犧牲になつたのかしら。

ゲルダ　（泣く。）わたしどんな事でも勘忍して上げるけど、わたしに夫を持たせて、其夫を取り上げるのは、わたしを殺すのだわ。それはひどいわ。

母　だつてわたしの方が氣に入るのだからしかたがないわ。わたしの方が、さあ、どんなと云つたらいゝだろう、詰まり男ずきがするのだわ。あの人はおこうさんより女の事がよくわかるのだよ。おこうさんには、人に取られてしまふまで、わたしの値打がわからなかつたのだ。

（戸を三度敲く音。）

誰だい敲くのは。

ゲルダ　どうぞお父うさんの事を惡くいはないで下さい。わたし生涯どんなに苦勞したつて、おこうさんにわるくした罪は償へないわ。だからわたしあなたに衝つ掛かるより外しかたがないわ、わたしをお

ごうさんに嗾けたあなたに。○あなたおぼえてゐるでせう。わたしがまだ小さい時、子供にわからない惡口を教へて、おごうさんにいはせたのです。だけれどおごうさんは其矢があたつても、わたしをしかりはなさらなかつたのです。誰が弓を彎いたと云ふことがわかつてゐたから。○あれもおぼえてゐるでせう。あなたわたしに教へて、學校で使つてもゐない教科書を買ふと云つてお金を貰はせて、其お金を二人でわけましたのね。○わたしごうしたらあんな昔の事を綺麗に忘れてしまふことが出來るでせう。命を取らずに記憶を消してしまふ藥はないものでせうか。わたし自殺するだけの力のないのが悔やしいわ。兄いさんもわたしも、皆あなたの犧牲だわ。力のない、意志のない犧牲だわ。あなた、まあ、なんといふ人でせう。自分の罪を悔いるといふことをもわからないのは。

母　では、わたしの子供の時はごうだつたとおもふの。わたしがごんな家庭で育つて、ごんな悪い事ををすはつたか、お前には想像が出來ない。これは遺傳だわ。だが、誰から始まつたのだらう。始て出來た夫婦からだと聖書にはあるわねえ。ごうもそれがほんたうらしいわ。だからわたしを責めるのはおよし。さうすればわたしもわたしの兩親を責めないで濟むし、わたしの兩親も兩親の兩親を責めないで濟むわけだからね。それにこれはごこの内でも此通りなのだ。只外から見ては知れないだけでね。

ゲルダ　若しさうなら、わたし此世に生きてゐたくないわ。ごうしても生きてゐなくちやならないなら、わたし目をねむつて耳をおさへ

て此世を騙けぬけて通つて、もつといゝ世界に生れかはつて來るより外しかたがないわ。

母　お前は極端に神經過敏とかいふものになつてゐるのだよ。今に子供の一人も出來て御覽。そんな事ばかし考へてはゐなくなるよ。

ゲルダ　わたしは子供は出來ません。

母　どうしてそんな事がわかるの。

ゲルダ　お醫者がさう云つたのです。

母　見立違だらう。

ゲルダ　又わかつてゐてさう云ふのでせう。それも讃こいふものだわ。わたしは石女(うまずめ)ですつて。わたしもブリイドリヒも一人前の人間にはなつてゐないさうです。だからわたし生きてゐたくないのです。

母　まあ、おしやべりだこと。

ゲルダ　わたし若し惡事こいふものが出來るのだと、あなた命がないわ。どうして惡事は出來にくいもんなのでせう。わたしあなたをぶたうと思つて手を振りあげたつて、自分をぶつことしきや出來ないわ。

（奥の樂曲忽ち歌んで、倅の叫ぶ聲聞ゆ。）

母　又お酒を飲んだのだ。

ゲルダ　かはいさうに。酒でも飲まなくちや、どうしていゝかわからないのだわ。

倅　（登場。醉を帶ぶ。吃る。）臺、臺所は、烟、烟が、一ぱいだ。

母　なんだつて。

伴　火、火事だらう。

母　なに、火事。

伴　うん。ほ、ほく、さうだらうとおもふ。

母　（奥の方へ驅けゆき、戸を開く。烟と焔。）火事だ。○ごうしたら逃げられよう。○焚け死ぬのはいやだわ。いやだわ（圈を畫して驅け廻る。）

ゲルダ　（兄に取りつく。）兄いさん、お逃。燒けて來るから。早く。

伴　己には逃げられない。

ゲルダ　だつて逃げなくちやあ。早く。

伴　逃げるつてどこへ。己は逃げない。

母　わたし焚け死ぬより飛びおりるわ。（出窓の戸を開き、驅け出づ。）

ゲルダ　あれ。

伴　かうするより、しかたがなかつた。

ゲルダ　では火を附けたのね。

伴　さうだ。○外にしやうがないからな。○お前ごうおもふ。

ゲルダ　さうね。みんな燒けてしまふがいゝわ、此穢の中から出やうはないのだから。兄いさん。わたしをしつかり抱いてゐて頂戴、しつかり。わたし、つひぞおぼえない、いゝ心持だわ。はれ〳〵してこゝは光明世界だわ。○かはいさうにかあさんは、意地惡で、意地惡で。

伴　さうだよ。かあさんはかはいさうだ。○なに、ゲルダ。暖い、い

ペリカン　〻心持ぢやないか。もう己も寒がりやしない。あのぱち〳〵いふのをきけ。古い、悪い、穢らはしい物が、今皆焚けてゐるのだ。

ゲルダ　もつとしつかり抱いて頂戴。大丈夫、火に焼けやしないわ。今に烟で息がとまるから。い〻匂がするわねえ。棕櫚と、それからおとうさんのロオレルの花環が燃えるのだわ。あ。今洗濯物のはいつてゐる箪笥が燃えるわ。それ、ラワンドの香水の匂がするわ。今はロオズの匂だわ。兄いさん、こはかないよ。もう少しの辛抱だわ。お轉びでないよ。○あ〻。かはいさうな、意地悪のかあさん。○もつとしつかり抱いてゐて頂戴。おとうさんがよくして遣るとおつしやつたわねえ。あんな風に抱いてね。クリスマスの晩をおもひ出すわ。臺所でお鍋からたべたわねえ。今夜だけは腹一ぱいたべられること、おとうさんがおつしやつたけ。○あれ、又匂がして來たわ。今鼠入らずが燃えるわ。コオフイイや、茶や、丁子だの、肉桂だの、薬味が。

伸　（興奮す。）お〻。夏だ。苜蓿（まつやし）の花がさいた。これから暑中休暇だ。白く塗りかへた汽船が、はと場に待つてゐる。一しよに段々をおりていきながら、白い船の腹をさすつたつけなあ。おとうさんが「己もこれから生きあがるのだ」とおつしやつたつけ。雑記帳はおさらばだ。「人間はいつもかうだとい〻」と云ふのも、おとうさんの詞だつた。おとうさんがペリカンだ。體の羽を抜いて子供を暖めて下すつた。自分は膝に癖のついたズボンをはいて、子供には華族の子のやうな服をきせて下すつた。ゲルダ。早く乗らう。汽船のがらん

ぐゝが鳴つてゐる。かあさんはもうキャビンにかけてゐる。あゝゐないぞ。どこにゐるだらう。かあさんもゐなくつちやだめだ。あゝあそこに來る。(間。)さあ、暑中休暇だ。

(背景の戸大いに開く。火光四射。○兄妹相擁してばたりと倒る。○幕。)

附言。此脚本中薪にする木は獨譯に Birke とす。然らば Betula 屬ならむか。姑く樺と書す。又食卓に上る野禽は獨譯に Schneehuhn とす。然らば Lagopus 屬か。俗にいふらいてうなどこれに屬す。今小鳥と書するは或は餘りに小さすぎたる感あるべし。蓋已むことを得ざるなり。薪の量目に佛語を用ゐたるは呼び易きが故なり。凡そ此の如き類杜撰頗る多し。博識の士幸に是正せられよ。

大正八年十一月　奈良客舍に於て　森林太郎

大正十年七月一日印刷
大正十年七月五日發行

（ペリカン）
定價金八十五錢

著作者　森林太郎
發行者　橋本義貞
發行者　田中淺平
印刷所　東京京橋區新榮町五の七　大倉印刷所

發行所　東京市神田區錦町二丁目三番地　善文社

複製不許

□善文社の新刊二著□

代議士 中野正剛著（忽三版）

現實を直視して

定價金貳圓八拾錢
郵稅金十七錢

思想、內治、外交の一大論文集にして、これ正しく現代日本に投げられたる活聲策なり。

米國文學博士
哲學博士 秋田義明著（好評）

徹底的人生觀

定價金貳圓
郵稅金十五錢

現下我が國の思想界は混沌として定る處を知りません、この書は力强く生きんとする眞面目な方々へお薦め致します。

389
54

終